「……なぁ、やっぱ言った方がいいんじゃないか？　弥桜絶対勘違いしてるだろ」
「絶対やだ。弥桜は晴臣のこと大好きなんだから絶対やだ。」
「んえぇー……」
　だって知ったら晴臣のこと大好きなんだから晴臣のこと聞きたいでしょ。何で弥桜と一緒にいるのは私なのに晴臣の話をしてやらなきゃならんのだ。

[B 面：私には秘密がある。]

「お前ね。ほんと、お前ね。妹が悲しんでるのを何でお兄ちゃんが黙って見過ごさなきゃいけないんだ。俺だって痛いんだぞ」
「痛覚無いでしょ」
「生者じゃなければ心が無いとでも思ってるのかお前」
「感情なんて本人が自分を誤魔化せばどうにでもなる」
「お前俺のこと大好きなのか大嫌いなのかはっきりしない？」
「どっちも本当だからしない」
「んんー……」

　生きていた頃よりも距離が近くなった（物理的に）（質量が無い存在なので物理的にという表現を使って正しいのかは分からないが）恋人は、今日もよく分からないことで悩んでいる。大好きと大嫌いは共存すると思うが。大好き 100%だなんて、それは盲目だ。私はこの恋人のことを、彼が生きていた頃よりも真っ当に大好きだと思っている。詳しくは長くなるので割愛するが。
　今は私の秘密の話だ。

　私には、大好きな親友にも未だ打ち明けられていない、秘密がある。

　幼い頃から、大人には見えにくい存在というものが見えていたのだ。それは、小さい子どもには珍しいことでもない。普通じゃないのは、自分の場合、それが年齢を重ねていっても薄れ

ていかなかったということで。
　とはいえ、そういった存在に、積極的に関わっていかなければ特に支障が生じることはない。関わらなければ生きている他人と同じだ。寧ろ、人外なだけに色々と便利な力を持っている存在も多く、生きている人間よりもいいお付き合いをさせて頂いているものもいる。
　この恋人も、そういうもので。
　死んでしんみりしていた日々の中で唐突に現れたこの人（もう人じゃないけど）は、今は、私と彼女の守護をしている。

「……一応、演技ではないから」
「ん？」
「……貴方と、私と弥桜と、一緒の空間を、三人では共有出来ないこと。貴方が生きていてくれたら、貴方が弥桜とも一緒に笑い合えたら、と思って寂しくなる。貴方は『勘違い』だと言うけど、……私は一生、貴方が此処にいることが嬉しいと同時に貴方が死んでいることが痛い」
「……ごめん」
「許さない。だからどっちにもはっきりしないと言っているわ」
「ん。ごめん」

　……真面目にしょげる晴臣が可笑しく思えてしまったから、もう、弥桜に打ち明けてもいいかもしれない。

　笑って彼女に話せる自信が無かった。本当の理由なんて、それだけだ。だから。

＊